

研究室紹介

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 北見農業試験場 研究部 生産技術グループ

地方独立行政法人北海道立総合研究機構北見農業試験場（以下、北見農試）は、1907年に北海道庁立地方農事試験場北見分場として常呂郡野付牛村（現北見市）に設置され、1910年に北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、1959年に北見市から現所在地（訓子府町）に移転した。2010年4月の道立試験研究機関の法人化に伴い、北海道立総合研究機構農業研究本部北見農業試験場に改組され現在に至っています。職員数は事務職員を含め39名（ほか農業改良普及指導員3名が駐在）、敷地面積は約156ha、うち試験圃場は約78haあります。

北見農試は、北海道立総合研究機構における八つの農業試験場の一つとして、畑作（麦類、馬鈴しょ、てん菜、豆類）、牧草に関する試験研究を主に行うとともに、オホーツク地域の農業に対応した試験研究を実施しています。

生産技術グループは、病害虫、栽培環境（土壌肥料）、地域支援を担当する10名で構成されており、そのうちの4名が病害虫関係の業務を担当しています。現在、当グループで実施している病害虫関連の研究課題を以下に紹介します。

1 テンサイ褐斑病抵抗性“かなり強”を超える系統に対する防除体系の開発

てんさいの品種である‘カーベ8K839K’（KWS 8K839）は、極めて強い褐斑病抵抗性を持っています。近年、生



図-1 テンサイ褐斑病の被害

産者の高齢化や後継者不足による営農面積の拡大等により、より省力的な栽培技術が求められており、褐斑病抵抗性に優れる品種を活用して省力的な防除技術を開発する必要があります。そこで、褐斑病抵抗性に優れる品種を活用し、農薬使用回数を現在より削減した防除技術を十勝農試および中央農試と共同で開発しています。

2 ばれいしょの輸出を促進するジャガイモシストセンチュウ類低減・管理技術の開発

ジャガイモシロシストセンチュウが発生している圃場ではシストセンチュウ類を根絶するため、対抗植物が栽培されています。その対抗植物の利用と営農とを両立するための適切な栽培体系について、農研機構北海道農業研究センターと共同で取り組んでいます。また、抵抗性品種の抵抗性程度とセンチュウ密度低減効果との関係について調査しています。

3 その他の試験

馬鈴しょのそうか病、疫病による塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウの抵抗性を評価し、抵抗性品種の育成に貢献しています。その他、小豆におけるマメノメイガの防除対策試験、センキュウベと病の防除技術の確立試験に取り組んでいます。発生予察調査定点圃場（病害虫の無防除圃場）を設置し、主要な病害虫の発生状況を定期的に調査しています。そのデータは北海道病害虫防除所で集約・解析され、発生予察情報として生産現場に向け発信されています。また、生産現場で突発的に発生する病害虫の診断試験や各種作物の新農薬実用化試験などを実施しています。



図-2 北見農業試験場の庁舎

〒099-1496 北海道常呂郡訓子府町弥生52
TEL 0157-47-2146

（主査（病虫） 小倉玲奈）